

「ありえたかもしれない物語」を通じた想像の未来

ケヴィン・リム (ナショナル・ギャラリー・シンガポール Co:LabX 副館長)

page. 92

「Alter-narratives –ありえたかもしれない物語–」は、我々に現実を疑うよう駆り立て、サイバーパンク調の物語によるモニターを用いてその再形成を試みる展示だ。多領域にわたる本展は、COVID-19のパンデミックによって混沌をきたした社会が一時停止し存在価値を問われるとき、我々が受動的に試練を受け止めるだけでなく、考察を深める助けとなり、さらには我々を意識的な実験へと突き進める。そしてその入場料はといえば、Wi-Fi 接続代なのだ。

東京藝術大学在学中の主催者達から共有されたところでは、「Alter-narratives –ありえたかもしれない物語–」は元々、陳列館と呼ばれる同学の美術館で今年3月に開催される予定だった。しかし世界中の無数の展示会と軌を一にして、本展はコロナウイルスの状況によってオンラインへと移行した。

現実として COVID-19 パンデミックは社会全体を通して前代未聞の波紋を引き起こしており、文化分野もその例外ではない。この状況は、あらゆる方向において新たな可能性を開いた。オランダにあるシグナー・ラーレン美術館では、安全上の理由による休館の際にフィンセント・ファン・ゴッホの貴重な絵画が盗まれた。[*1] またスペインのブラド美術館が80年ぶりとなる長期休館から営業を再開した際 [*2] には、所蔵する絵画の5分の1のみを展示し、混雑防止でチケット販売数を大幅に削減する中で、自館の大前提を再考するよう迫られた。

営業再開に際してブラド美術館長のミゲル・ファロミールは、再築された美術館を「すべてのエッセンスが小さな空間に凝縮された」香水になぞらえた。彼は、未だかつて視覚・舞台芸術から得られる喜びが、ここまで組織的に否定されたことはなく、しかしそれは人々の生活の中に「文化の重要性を擁護する」余地を生んだと観察した。ファロミールは、トンネルの先には光が待っているように、削減された来館者数によって鑑賞者は作品との並外れた「出会い」を経験しており、空間との親密感が蘇っていることを指摘した。

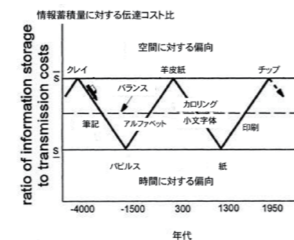
「Alter-narratives –ありえたかもしれない物語–」はオンラインに移行/移動することをやむを得なかったとされる一方で、もしかするとオンラインのために

ある/作られたのではないかとも思える。アジア出身のアーティスト達による、視覚と音が成す無数の蜃気楼。5人の日本人アーティスト、2人の韓国人アーティスト、そして1人のシンガポール人アーティストがボーダーレスな展示会に集まり、複数の現実をリミックスし再利用して、行き先の危ぶまれる人類の未来を提起する。

本展は、20面体のダイスをインターフェースとして始められた。それは偶発的で容赦の無い現実のありさまを比喩的に発信する一方で、アーティスト達の実験にも見てとれるように、ありとあらゆる可能性に平等なチャンスを示している。各面が等辺三角形で形成される20面体はローマ時代、プトレマイオス朝に遡り発見されているが、[*3] それが当時ゲーム用のダイスとして使用されていたかさえ定かではなく、本展の作品における神秘的かつ予言的な側面に相応しい。

文明という概念から発展させると、展示会を「オンラインにする」という選択はコミュニケーション媒体としてのインターネットと社会におけるその影響に関する問いを再喚起させる。ハロルド・イニス教授は大きな影響を残した著作『メディアの文明史』[*4] において「コミュニケーションの改良は、その理解をより難解にする」と著している。

一見難解だが、イニスはコミュニケーションの媒体は時間に偏向したタイプと空間に偏向したタイプの2つに分類でき、どのタイプが主流かが、そこでどういった文明が生まれるかに決定的な影響を与えると説く。



a. 時間に偏向したコミュニケーション媒体には、クレイ・カービングや石版、羊皮紙やペラム紙に書かれた手写本、またホーマーの口承詩といった

口述の情報源等が含まれる。これらには何世代にもわたって存続する物語やメッセージを伝達する目的があるが、限られたオーディエンスにのみ到達する傾向にある。

b. 空間に偏向したコミュニケーション媒体はより一過のた。これにはラジオやテレビ、大量印刷の新聞といった、長距離を越えて人々に情報を伝達するが短い露出時間を持つ近代的なメディアが含まれる。

従来の展示会は、臨場性と帰属をとまなう時間に偏向したコミュニケーション媒体として見る事ができる。他方でオンライン展示会は、空間に偏向した媒体の文脈に沿っており、より速くへ、より速く伝達されるが、その社会的記憶の寿命においてはリスクをとまなう。イニスはエジプト・ギザでスフィンクスと大ピラミッドを観察しながら「ピラミッドを建立した王権は、パピルスが石に代わりコミュニケーションの主たる媒体になると自らの絶対権力を放棄せざるを得なかった」と記している。文明への決定的影響に関して言えば、時間に偏向したメディアは安定、コミュニティ、伝統、そして宗教を重んじるが、空間に偏向したメディアは急速な変化、唯物主義、世俗主義、そして帝国を生み出すことを促す。「ありえたかもしれない物語」が我々をどこへ向かわせるかは、各作品を通して見る事ができるはずだ。

本展の作品は、オンラインで伝達されることからそのほとんどがパフォーマンスであり一過のたであるが、物質文化にも関連付けることができる。

a. 《One Million Seeings》では原田裕規が、写真を見るという長期的かつノスタルジックな行為に鑑賞者を招待し、展示会会期中にコンビニエンスストアで彼のアートブック (PDF) を印刷するよう指定する。

b. 《風景構成》では朴祥炫が、自身の過去の展示会を自宅の寝室で再築することを通して「自粛アート」のあり方を探求し、一般公開される展示会に対してパーソナル・スペースの概念がどうの

page. 93

ように作動するのか、その価値を問い直す。

c. 《Spinning, Weaving, and Thinking ii》では鈴木美緒が、既にある布のテクスチャーから糸を紡ぎ直し、ノスタルジアを全く新しく、量感的で圧倒的なものへと解体する美しい空間作品を創り出す。

COVID-19 がアーティストやキュレーターをオンラインへ移行させているという見方がある一方で、「ネットアート」[*5] としても知られるオンラインアートはこれまでも常にオンライン上で構想され、生まれてきたという事実が認知されるべきだろう。世界中のギャラリーが展示会をデジタル化しているが、韓国のナム・ジュン・パイクやロシアのオリア・リアリナのようなアーティスト達はこれまでも存在しており、身体とヴァーチャルを行き来する作品を制作してきた。興味深いことにオリア・リアリアの作品はいまだに www.arebyte.com のウェブサイトから見ることができる。「ありえたかもしれない物語」は、こうした場に係る関心呼び起こし、現在における美術館のあり方、そしてその社会における目的を我々がどのように想像するかの、新しい可能性を開いたと言える。

【註】

* 1 : Van Gogh painting stolen from Dutch museum closed by coronavirus, *The Straits Times*, March 31, 2020

* 2 : Spain's Prado reopens its doors, *Financial Times*, 6 June 2020

* 3 : Minas-Nerpel, M. (2007). "A Demotic Inscribed Icosahedron from Dakhleh Oasis." *The Journal of Egyptian Archaeology*, 93, 137-148. Retrieved June 21, 2020

* 4 : Innis, Harold. (1951) *The Bias of Communication*. Toronto: University of Toronto Press, p. 28.

* 5 : Visual Arts - Net art: the works that were conceived and born online, *Financial Times*, 8 June 2020